

外科医アストリー・クーパー卿の教え

柳澤 波香

青山学院大学／津田塾大学

アストリー・クーパー卿 (Sir Astley Cooper, 1768年-1841年) は19世紀前半のイングランドを代表する外科医である。本発表では、その臨床研究者と教育者としての側面に注目し、生涯をたどる。イングランド東部ノーフォーク州に英国国教会牧師の四男として出生したクーパーは少年期の経験が契機となり外科医を志した。外科医であった叔父の導きにより、1783年、ロンドンのガイ病院で外科修業を開始し、翌年、自らの意思でセント・トマス病院に移り、外科医ヘンリー・クライン (Henry Cline) に師事した。クラインの勧めでジョン・ハンターの講義を聴き、感銘を受けた彼は、エディンバラで短期修業をしたのち、ロンドンに戻り、セント・トマス病院で師クラインと共に解剖学と外科学を教え始めた。1792年夏にパリに滞在し、デソーの解剖を見学する機会を得、また外科医デビュイトラン男爵と面会した。同年秋に帰国後、クーパーはセント・トマス病院に復帰し、1792年秋からは開業も始めた。病院では庶民、開業では上流階級の患者を診療しながら、症例の詳細な記述を開始し、晩年になっても必要に応じて訂正を行った。これはハンターから学んだ姿勢であった。1798年にはヘルニア、気管支閉塞に関する論文を発表し、その後もほぼ毎年新知見を医学雑誌に発表した。

1800年、クーパーはガイ病院の医師となり、同病院とセント・トマス病院双方で講義を行った。病院医師としての任務と開業は多忙を極めたが、医学生の教育に非常に熱心であり、厚い信頼関係で結ばれた師クラインと協力し、医学教育、外科学の発展に尽力した。

クーパーの講義は常に人気があり、大好評を博していたため、『ランセット誌』の創刊者トマス・ウェイクリー (Thomas Wakley) は、創刊号のトップ記事として1823年10月1日にセント・トマス病院で行われたクーパーの講義の見聞録を掲載した。(これはクーパーの許可なく掲載され、クーパーは初め当惑したが、ウェイクリーは教え子であったため、最終的にはこれを認めた。) 講義のなかで、クーパーは先ず、外科医としてのあるべき資質 (治療の手際の良さ、優しく穏やかなマナーの大切さ、冷静さ) を説き、外科医としての善き資質は患者の苦しみを軽減することにあるとしている。さらに、安全な手術のためには解剖学の正確な知識が必要不可欠である旨を強調した。優れた解剖学者でもあったクーパーは詳細な解剖スケッチを著書 *Principles and Practice of Surgery* の中に残しているが、解剖の知識が不十分な外科医による手術は、患者の死、訴訟のリスク、外科医自身の恥になると講義の中で警告した。麻酔のない時代に外科手術を行うことは患者の多大な痛み、危険を伴うことであった。成功の見込みのない手術は行わないことと戒め、外科医の心得として「己の欲するところを人に施せ」というマタイ伝の文言を引用した。医学生の教育に熱心であったクーパーは、病院実習の際の心得や患者へのマナー、症例を数多くみることの重要性についても言及した。クーパーは生理学の知識や諸科学への関心を持つことも外科学の修得には欠かせないことを指摘した。外科医と内科医の協力関係を重視し、外科医が薬に関する知識を持つ必要性を言明した。講義はジョン・ハンター以来のイングランドにおける外科学の先達への尊敬の念、外科学の将来を担う医学生への期待で締めくくられたと『ランセット誌』は伝えている。

クーパーは開業収入により非常に裕福となったが、外科学と医学教育の発展のために私財を投じ、病院の手術室の拡充や学生の懸賞論文の創設をはかった。また弟子の資質を的確にみて育成にあたり、弟子のソーンドース (Saunders) による英国初の専門病院であるムーアフィールドズ眼科病院の設立はそのひとつの例である。